

笠原伸一郎先生のアナザーストーリー

福原康司
経営学部准教授

笠原伸一郎先生と初めてお会いしたのは、今から30年近く前になります。学内外のゼミナール(以下ゼミ)の研究交流を促す学生自治組織のゼミナール連合会(以下ゼミ連)は今も各大学に存在しますが、当時私は専修大学経営学部のゼミ連の執行部委員長に就任し、白鳳大学から専修大学に移籍されて間もない笠原先生が同会の顧問を務められていたことが、出会いのきっかけでした。

研究活動だけでなく、レクリエーションを含めたゼミ間交流は今でこそ活発に行われていますが、当時は徒弟制度の色彩が色濃く反映されていたからか、ゼミ間の研究活動以外の交流はそれほどなかったように記憶しています。したがって、ゼミ担当教員以外の先生と飲みに行くことはそれほどなかったわけですが、顧問としてゼミ連執行部の飲み会にお誘いしたら、気さくな笠原先生は喜んで参加して下さいました。それがご縁で、私の所属していた加藤茂夫ゼミとの交流がスタートし、中野サンプラザでの大きな合同パーティーにまで両ゼミの交流は発展しました。

笠原先生の特徴の1つは、兎にも角にも秀逸な話術で、私も「国際経営論」という講義の中で何度もその話術に引き込まれた一人です。実際、そのユニークな話しぶり、とりわけシュールなそれに魅了された多くの学生達が毎年笠原ゼミの門を叩き、当時から今もなお専修大学経営学部の人気ゼミの一角をなしていました。また、ユニークな部分は話しだけに留まりません。私が学生時代、偶然キャンパスで笠原先生とお会いすると、「福原君、ちょっと時間ある？」とお声かけをされたので、先生に言われるがまま付いていくと、そこには愛車ベンツが停まっていた。どこかドライブにでも連れて行ってもらえるのかな？という期待と、なぜ私が誘われたのだろうという不安が錯綜する私の気持ちをよそに、当時まだ珍しかったキーレスエントリー(リモコンで自動車のドアを開閉するシステム)でおもむろに車の鍵を開けられました。「さあ乗って」という言葉が飛び出すのだろうと待ち構えていると、そそくさと荷物を車に積み込んでいるご様子にしびれをきらした私が、「で、先生、何のご用件でしょうか？」と尋ねると、「これを見せたかったんだ」と無邪気に笑いながら車に乗り込み颯爽と走り去るお姿を、呆然と立ち尽くしながら見送ったことを今も鮮明に覚えています。

そんなおちゃめな笠原先生の現在の講義のご様子は知る由もありませんが、少し前に私のゼミ生

から漏れ聞くに、講義中先生のスマホが突然鳴り響き、それに慌てふためいて対応する姿で大きな笑いを取っていたようです（一説によると自作自演だという噂もチラホラ）。そうかと思うと、「青年よ、大志を抱け」といった類いのメッセージを講義中に発せられることもしばしばで、実は笑い溢れるトークの数々は、照れ屋でシャイな笠原先生がご自身の情熱的な側面を包み隠すためのブラフだったのでないかな、と個人的には思っています。

時がだいぶ流れ、同じ職場の同僚として久しぶりに再会した時、そこには昔と変わらぬ若々しい笠原先生がいらしたことに驚愕しました。また、学生という立場に加え、教員という立場でもゼミ間交流をさせて頂いたことは、私にとってかけがえのない財産となりました。まだまだ笠原先生との思い出は尽きないのですが、紙幅の限りもあるため、あと一つだけ大切な思い出をあげろと言われたなら、クリスマスシーズンまっただ中で開催された教員組合の忘年会後、何を血迷ったのか、表参道のおしゃれな喫茶店に二人で入ってしまったことでしょうか。当然店内にはカップルしかおらず、二人がまるで恋人であるかのように二人がけの小さなテーブルに通され、膝をつきあわせてお茶をしたことが脳裏に焼き付いて離れません。

個人的にはもう一度あの笑いに満ちた講義を郷愁にかられながら拝聴したかったのですが、コロナ禍で最終講義が実現できず、残念で仕方ありませんでした。ご自身が常に笑顔で、その笑顔と巧みな話術で周囲に笑顔を作り上げる笠原先生という存在が専修大学経営学部からなくなってしまうことは、学生や教職員にとって大きな痛手です。ただ、笠原先生は若い頃画家になる夢があったそうで、絵画に勤しむなど、第二の有意義な人生がきっと始動することと思われまます。長年の専修大学での研究と教育に深く感謝しつつ、今後のご活躍を祈念しております。